

## シンポジウム報告

### (二)戦後の東アジアにおける日本語文学―移動・交流・支配―

主催…立教大学日本文学会

共催…立教大学日本学研究所

日時…二〇一六年六月一二日(日)

一三時〇〇分―一八時三〇分

場所…立教大学池袋キャンパス太刀川記念ホール

去る二〇一六年六月一二日。立教大学日本文学科／専修の設立六〇周年記念企画のひとつとして以下の国際シンポジウムが開催された。以下、当日の内容を簡潔に紹介する。

本シンポジウムのテーマは「戦後の東アジアにおける日本語文学」である。従来、私たちは「日本」という同一性のもとで思考を巡らし、日本人が日本語で書いた文学＝日本文学という認識をなかば自明のものとしてきた。だが、日本の帝国主義がもたらした植民地支配の歴史を踏まえて東アジアの文学を読むと、「日本」という国家の枠組みで文学のありようを把握すること、それがあたたかも「日本人」の占有物であるかのように考えることがいかに誤謬であるかが明らかになる。在日朝鮮人作家の金石範が「日本語文学」と歴史性」(『跨境 日本語文学研究』第2号、二〇一五年八月)というエッセイのなかで、

「東アジアと同時代日本語文学」と言った場合、それは戦前の日本帝国の東アジアの版図と関係するものだろうが(大東

亜共栄圏における日本文学を軸とした大東亜文学など)、この時代には日本語文学の概念はなかった。それは帝国言語としての日本語の支配、優位性を前提とするものであり、とくに植民地であった朝鮮や台湾などで、被支配の劣等民族、文学は支配民族の文学イデオロギーの反映――「上位文学」である日本文学の「下位文学」であって、それは日本帝国主義による文学にそのまま当て嵌められた。従って日本における日本作家によるものを、ことさらに日本語文学と呼ばない。(中略) 日本語文学は極めてポストコロニアルな呼称であって、この属性を欠落させたまま「日本語文学」を、例えば東アジアにおける境界横断性を論じることが出来ないだろう。それは没価値的な一般概念化の用語になって、本来の日本語文学が持っている歴史性を否定することになるだろう。

と述べたように、いま私たちに求められているのは、東アジアにおける人の移動・交流・支配という観点から文学表現を捉え直し、自分たちがあたり前にしてきた「日本文学」という価値観を解体することである。かつて日本語が東アジアにもたらした帝国言語としての歴史、あるいは、「日本人」ではない書き手たちによる新たな日本語表現を包括する「日本語文学」という立場から文学の可能性を追求することである。本シンポジウムは、そうした期待を込めてテーマ設定を行い、文学の生成・流通過程を東アジアという文脈のなかで再構成することをめざした。

第一部の基調講演には、『死産される日本語・日本人――「日本」の政治―地政的配置』(一九九六年、新曜社)、『日本思想と

いう問題——翻訳と主体』一九九七年、岩波書店、『日本／映像／米国——共感の共同体と帝國的国民主義』（二〇〇七年、青土社）、『希望と憲法 日本国憲法の発話主体と応答』（二〇〇八年、以文社）など、膨大な著作を通じて日本の思想・文化・文学研究に画期的な業績を残してきた酒井直樹氏（コーネル大学）を迎え、「主体的技術としての翻訳——人文学の宿命について」というタイトルで講演していただいた。酒井氏は、「翻訳」という概念をイメージ、継承、図式といった観点から考察し、「翻訳」がつくりだす世界関係や制度といったポリテックな側面をいかに可視化していくかが重要であると指摘した。

第二部では、韓国、中国、台湾、沖縄それぞれの国や地域で日本語文学を研究するとともに、日本語文学のありようを外側から眼差し、その枠組みそのものを解体／再構築する取り組みを続けている気鋭の研究者として、鄭炳浩氏（高麗大学）王成氏（清華大学）、笹沼俊暁氏（台湾・東海大学）、新城郁夫氏（琉球大学）を招聘し、それぞれの研究成果を発表していただいた。——ここでは各発表者が事前に提出した発表要旨を紹介しておく。

### （１）鄭炳浩

#### 戦後、植民地日本語文学をめぐる日・韓文学史の記憶

周知のとおり、日本が敗戦に至るまで東アジアには多くの植民地日本語文学が残されている。その日本語文学を創作した主体は植民地を経験した日本人作家、植民地に定住している日本人コミュニティ、あるいは現地の被植民者作家など、様々である。本発表では一九四五年日本の敗戦以後、植民地朝鮮における日本語文

学をめぐり、日本と韓国の文学史ではそれをいかに記憶し、意味付けをしているのかを分析する。取り分け、本発表では韓国における「親日文学」という観点が二〇〇〇年代「二重言語文学」という概念へと変化を成し遂げるプロセスをととして文学史の記憶の問題を取り扱う予定である。

### （２）王成

#### トラベル・ライティングと中国表象

##### ——阿部知二の旅行記をめぐる

戦前、戦中と戦後、日中間を往来した日本人が数多くの旅行記を書き残している。それは東アジア地域における日本の帝国化がもたらした歴史的記憶を検証するのに有効なテキストである。生涯六回も中国を旅行した阿部知二の中国旅行が計り知れない意味をもっている。それは阿部知二文学の解明だけではなく、日本近代文学の見直しにもかかわっている。本発表は中国旅行を表象した阿部知二のテキストを取り上げて、旅行と文学、紀行文と小説、中国と日本などの問題を、「移動・交流・支配」という観点から考察してみたい。

### （３）笹沼俊暁

#### 現代日本作家と中国・中国語

前近代の日本列島の文化は長きに渡り、中国大陆の言語文化と向き合うことを主要テーマとして展開した。だが後に中国は近代化に後れを取り、日本近代の文学は、欧米文化と対決することを主要課題として展開した。特に戦後文学は、占領者であり国際的な

覇者であるアメリカとその言語に、いかに向かい合うかということを命題とした。しかし、東アジアにおいて中国が「強者」としての姿を見せ始める今、日本文学は同時に「中国の影」とも向き合わざるをえなくなっていくであろう。中国語が市場価値を高め

つつある今、

文学がどうこれに向き合うかは今後重要な問題になっていく可能性がある。本報告では、リビ英雄、楊逸、島田雅彦、矢作俊彦、横山悠太、新井一二三などを参照しつつ、現代日本作家としての「中国」および「中国語」について考えた。

#### (4) 新城郁夫

##### 想起され忘却されるアメリカ

##### —— 沖縄文学の成立をめぐる

沖縄の近代の幕開けとして「琉球処分」(一八七九/明治一二年)が言及されることは多いが、その際に、近代沖縄成立の契機が近代主権国家日本への「併合」と認識されることがあっても、その動向に深く関わっているはずのアメリカの動きが注目されることは少ない。むしろ、沖縄の近現代を、日本との相補的対峙関係からのみ思考する枠組は、アメリカの忘却を通じてこそ、日本の国家イメージ再編を反復的に構築してきたと言えるかもしれない。本発表は、このアメリカの隠蔽に抗う試みとして、近現代沖縄文学のなかに描かれたアメリカ、なかでもペリー来航に関する表象のあり方を考察していく予定である。考察にあたって、上間正雄の戯曲『ペリーの船』(『沖縄毎日新聞』一九一一年/明治四四年)と、大城立裕『カクテルパーティー』(一九六七/昭和四二年)の比較を試み、そこから、想起を通じて忘却されるアメリカ覇権の痕跡を跡づけてみたい。

第三部では、これまで数多くの国際会議やシンポジウムをコーディネートしてきた坪井秀人氏にデイスカッサントとして登壇してもらい、議論の方向性を整理してもらうとともにパネリスト同士の意見交換を促してもらった。また、後半では本学の金子明雄氏、林淑美氏にコメントをしてもらったうえでフロアを交えての質疑応答を行った。

当日は日本近代文学の研究者、大学院生など約九〇名が参加し、

長時間にわたる講演、発表、議論に耳を傾けた。タイトなプログラムを組んでしまったため、フロアからの質疑応答に十分な時間を割くことができずご迷惑をおかけした面もあったが、酒井直樹氏の基調講演をはじめいずれの登壇者も企画の趣旨を踏まえた優れた内容であった。

なお、今回招聘した発表者のうち王成氏、新城郁夫氏の二名は立教大学大学院の出身者であり、今後の大学院生の研究活動に対して様々な刺激と効果をもたらすはずである。

## プログラム

一二時〇〇分

開場

一三時〇〇分

趣旨説明 石川巧（立教大学）

一三時一〇分～一四時〇〇分

基調講演

「主体的技術としての翻訳——人文学の宿命について」

酒井直樹（米国・コーネル大学）

## 〔休憩〕

一四時一〇分～一六時四〇分 研究発表

（１）戦後、植民地日本語文学をめぐる日・韓文学史の記憶

鄭炳浩（韓国・高麗大学）

（２）トラベル・ライティングと中国表象——阿部知二の旅

行記をめぐる 王成（中国・清華大学）

（３）現代日本作家と中国・中国語

笹沼俊暁（台湾・東海大学）

（４）アメリカの想起と隠蔽——沖縄文学における「ペリー

来航」表象をめぐる 新城郁夫（日本・琉球大学）

## 〔休憩〕

一六時五〇分～一八時三〇分 集中討議

ディスカッサント

坪井秀人（日本・国際日本文化研究センター）

コメンテーター

金子明雄（立教大学）、林淑美（立教大学）

司会 石川巧（立教大学）

一九時〇〇分～二一時三〇分 レセプション

（文責 石川巧）